

(誰が)

怜奈を犯したグループだろう。ならば、その正体不明のやつらはいったい何者なのか。でも、今はそんなことはどうでもよかった。

「ごめんね」

なんとか身体を起こし龍矢にしがみつく。そして、自分でも意外だったのだが、大胆に唇を重ねてしまった。本当のファーストキスは、ロストバージンのあとになってしまった。だから、なにかを取りかえそうとあをいはキスに溺れた。

しかし。

「よおーよおー。お二人さん。ずいぶんとお熱いねえ」

瓦礫がれきを踏みしめる音に、あをいははつとした。

「お、おまえら」

いつかの少年たちだった。しかも、今度は人数が増えている。

「なあ、龍矢。おまえばつかハメハメしてるなんてずるいな。俺たちにも、今とときめくグラビアアイドルの橘あをいちゃんと、セックスしてーんだ」

「やめろ。約束じゃないか」

龍矢が少年たちの前に立ちふさがり、手をひろげる。

「るせえ」

がたいのいい少年が龍矢の首根っこをいとも簡単にわしづかみにし、そして腹を強く蹴りあげる。

「ぐおっ！」

くの字になって苦悶する少年。よろめいたところをさらに蹴りが炸裂する。体が吹っ飛び、トタン板の壁に激突する。

「やめて！」

あをいが叫ぶ。少年たちにはやにやと笑っていた。あをいの言葉を待っていたのだ。「あたしが、あたしがなんでもしますから。た、龍矢くんには……ひどいことをしないでください」

どうなってもいいと思った。龍矢が自分をかばってくれただけで。それだけで、もう充分だと思った。

「じゃあ、あをいちゃん。裏路地で大胆エロ写真集&ビデオの撮影会しちゃうか」予想通り。猥褻な要求だった。もとより、少年グループの目的は龍矢をエサに、あをいに、この卑劣な撮影を認めさせることだった。

少年たちは手に手にデジカメやビデオカメラを取りだし、ニヤニヤしながらあをい

の反応をうかがっている。

あをいは小さく首を縦に振った。

「くく。あこがれのアイドルの制服姿だぜ」

「よし、自慢の胸を出したら、スカートまくって、性器を開いてみせろ！」

まんまと罠にはまった少女は、言われるままに乳房を剥きだし、スカートをまくり、股布にそつと手をあてがう。

「……は、はいっ」

淫液と精液にベトベトになった股間はそれだけでも卑猥<sup>ひわい</sup>だった。

「よく見えねえ。ほうら、その井戸に足のつけて、ちゃんと見せてみる」

「わ、わかりました」

あをいは、少年に言われるままに、古井戸をふさいだコンクリートのフタに片足をのせ、自ら性器を開いて見せた。粘った露を滴<sup>したた</sup>らせる陰毛をかき分けると、あをいの肉粘膜があらわになった。刺激から解放されて萎<sup>な</sup>えかけたクリトリスを、要求どおり剥きだしにする。

「ようし、しごけ。勃起するところをクローズアップ撮影だ」

指腹で押さえつけると制止がかかった。先端だけをしごいて、勃起させろと言う。

しかも、実況つきでだ

「うぐああ、お、うああ、あ、あをいは、今、クリトリスの先つちよを、おお、しごいてえつ。勃起させてます。うあ。ひぎつ！」

デジカメやビデオにとらえられた映像のなかで、クリトリスが見るみる勃起している。美少女アイドルのイメージとはかけ離れた肉粒が、はしたないほど充血して立ちあがった。

「いいぞ。ほうら。次はおれたちのものになった記念撮影だ。膺を指でパツクリ開いてみせろ、子宮が見えるまでだぞ。それで、あをいちゃんの、最高の笑顔ってやつを撮らせてもらおうか」

「それ、は、で、できません」

あまりの屈辱的でみじめすぎる撮影要求に、思わず否定した。

「うぐああああ。おおお」

とたん、龍矢が苦悶の叫びをあげた。鳩尾みぞおちに蹴りが炸裂していた。

「やめてっ！ やります。やりますから！」

「ようし、やれ」

少女の側に少年が寄ってきて、耳打ちをした。その言葉を聞いたあをいが、涙を滴

らせて唇を震わせる。

「うぐっ。うああ、っ。痛いっ。いいっ」

無理なのだ。この前処女をなくしたばかりなのに、パツクリ開かせるなんて、できようはずがない。それでも、あをいは裂けるような悲痛を感じながらも人差し指と中指を膣にねじこませ、覚悟を決めて割り開いた。

「くあああ。うぐうっ」

あをいの肉穴がV字に大きくくつろげられる。指と指の合間から、まだ肉壁にへばりついた処女膜が見て取れた。

「うあああ。おお。あ、あをいのっ。国民的、人気の、っ、せ、清純派のアイドルの……おお、お、おま×こを、どうか、ゆ、ゆつくりご覧くださいっ」

哀れだった。少年たちは、あをいに淫猥なセリフを吐かせて喜んでいた。まるで、弱ったネズミを足先で転がす猫みたいに、撈なぶっていた。

「今度は笑ってみせろ、いいか、グラビアの撮影だと思ってイイ顔するんだぞ」

「はい……」

言われるままに、あをいはVサインをし、無理やり笑顔をつくった。気づけば、自然に涙がこぼれていた。

